

臨床的に広く用いられている。最近, statinが骨芽細胞の分化を促進し, 培養系で石灰化を促進させることを見出した。本研究ではstatinの骨代謝に対する作用を, ラットを用いてin vivoの実験系にて長期的投与における骨密度について検討を行った。

(方法) 8週齢SD系雌ラットに, 卵巣摘出手術(OVX)を施し, 10週齢で上顎両側臼歯を抜去した。14週齢でAtorvastatin及び, 合成ヒトPTH(1-34), あるいはEstradiolを週4回8週間, 皮下投与した後, 動物を屠殺した。血液中のカルシウム, リンを測定した。また, 下顎骨, 腰椎の骨密度をDEXA法で測定した。さらに, 下顎骨臼歯部において, 高解像度マイクロCTを用いた骨内部構造についても検討を行った。

(結果) Atorvastatin 2mg/kg, もしくはPTH 1 $\mu$ g/kg, Estradiol 10 $\mu$ g/kgの単独投与では腰椎, 下顎骨, いずれの計測部位においても骨密度の変化が認められなかった。Atorvastatin 2mg/kgとPTH 1 $\mu$ g/kgを併用投与した結果, 腰椎, 下顎骨枝部, 下顎骨臼歯部の骨密度を有意に増加させた。Atorvastatin 2mg/kgとEstradiol 10 $\mu$ g/kgを併用投与した結果, 腰椎, 下顎骨臼歯部の骨密度を有意に増加させた。これら骨密度への影響は $\mu$ CT像においても確認された。

(結論) Atorvastatinは, ヒトPTHやEstradiolと併用投与することで下顎骨, 特に歯槽骨の骨密度を有意に上昇させることが明らかになった。これにより, 歯科領域における骨量改善薬としての可能性が示唆された。

#### 10) 会津中央病院歯科口腔外科における関節突起骨折へのアプローチ

○強口 敦子, 宮島 久, 馬庭 暁人  
平野 千鶴, 大友 友昭, 大溝 裕史  
古田 撰夫, 関 康宏, 師田 智子  
(会津中央病院歯科口腔外科)

関節突起骨折は, 部位・方向・偏位や機能障害の程度によって保存療法または外科療法が選択される。しかし, その選択基準は, 施設や担当診療科間で相違がある。また, 術後療法は顎機能回復において予後を大きく左右するにもかかわらず,

重要視されない傾向にある。今回演者らは, 会津中央病院歯科口腔外科を受診した関節突起骨折症例の臨床的検討を行ったので, その概要を報告した。

対象は, 平成12年4月から平成16年3月までの4年間に, 会津中央病院歯科口腔外科を受診し, 関節突起骨折と診断された23例で, 男性15例, 女性8例, 平均年齢41.2歳であった。

症例数は年度ごとに増加傾向を示していたが, 絶対数の増加ではなく, 関節突起骨折ばかりでなく, 顎骨骨折の治療における当科の役割が認識された結果と思われた。

治療法について検討した結果, 下記のような結論に達した。1. 関節突起骨折に対する治療の理想は整復固定であるが, 高度な技術が必要で, リスクを伴う。2. 保存療法でも, ほぼ十分な機能回復が得られる。3. 機能回復を得るために, 治療法の選択には十分配慮し, 顎機能訓練などの後療法が重要である。

#### 11) 脳梗塞後遺症症例に対する軟口蓋挙上装置の使用経験

○宮島 久, 平野 千鶴, 強口 敦子  
馬庭 暁人, 大友 友昭, 大溝 裕史  
古田 撰夫, 関 康宏, 師田 智子  
(会津中央病院歯科口腔外科)

現代医学の進歩は平均寿命を延長させ国民生活の向上に寄与している。その結果, 歯科を受診する「いわゆる有病者」も増加するようになった。脳血管障害も例外ではなく, 救命率やリハビリテーション医学の向上に伴い, 咀嚼・嚥下・構音などの口腔機能回復に関する歯科への要求が増加している。今回演者らは, 軟口蓋挙上装置により良好な口腔機能回復が得られた症例を経験したので, その概要を報告した。

症例は81歳の女性で, 初診の約1ヶ月ほど前に, 脳梗塞にて会津中央病院脳神経外科に入院。急性期治療が終了し, 構音障害の治療目的に当科を紹介となった。治療は先ず, 歯周治療を含めた口腔内清掃から始め, 早期QOLの向上を図る目的に, 同時に軟口蓋挙上装置を作製した。その後, 要抜去歯の抜歯を行い, 再度, 軟口蓋挙上装置を作製